

編集後記

最近の消化管内視鏡は、その本来の立場である肉眼診断にとどまらず、組織診断を可能にし、さらには治療の一端を担うに至った。ここ10年の間に、内視鏡下の治療応用として、異物摘出、消化性潰瘍の局所注射、緊急止血、polypectomy 等があり、また最近では本特集の主題である乳頭括約筋切開術も行なわれるようになった。内視鏡 polypectomy はすでに広く普及し、アンケート調査にもある通り、多数施設が多数例の経験を積むに至っている。このような現象は、はやくから予想されていたが、これほど身近なものになるとは思っていなかった。

消化管 polypectomy については、その有用性の主体を治療におきたい気持ちを捨てがたいが、現在では組織診の正確さ、完全生検に応える最良の方法として本法を認めるべきで、治療そのものは従属的とするのが妥当のように思う。もっとも、大腸のポリープ癌に対する本法による治療の是非については近い将来明らかにされるであろう。アンケート調査にもある通り、出血・穿孔その他の事故例も決して少なくはないので、十分慎重な態度で本法の実施にあたられることを願うものである。

一方、乳頭括約筋切開術は西独、日本で開発され、その有用性その他について逐次検討が加えられているが、現在のところ、胆石手術後の胆管遺残結石に適応をしぼりたい。また、その方法、手技、安全性確保の面でもまだまだ問題が多いことであり、その実施には暫く時間の余裕が欲しいというのが偽らざる気持である。

その他、胃粘膜下腫瘍摘出術、傍乳頭部胆管十二指腸瘻に対する乳頭切開術など、endoscopic surgery の新しい開拓の一面といえる。

また、珍しい症例報告3題も興味深い。

<常岡 健二>

<編集> 早期胃癌研究会